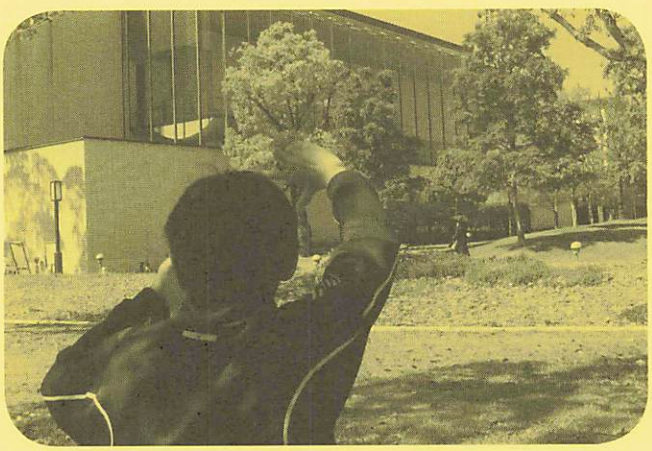
第Ⅲ部
研究の総括







第1章　生徒の実態調査

1　実態調査の実施

生徒の実態を把握し，よりよい教育活動を展開していくために「生徒理解のための調査　Multi（マルチ）」（大阪心理出版）を活用した。

(1) 学校で習う内容は，難しいですか。
㋑ むずかしすぎる
㋺ ふつう
㋩ やさしすぎる

(2) 勉強は特別に（塾や家庭教師，家の人などに）教えてもらわねばわかりませんか。
㋑ 教えてもらわなくても分かる
㋺ 教えてもらわねば分からない
㋩ 教えてもらっても分からない

(3) それほど勉強しなくても，まあまあの成績をとる自信がありますか。
㋑ 自信はある
㋺ やはり，勉強しなければとれない
㋩ 勉強してもとれない

(4) 勉強がむずかしいとき，あきらめてしまうことが多いですか。
㋑ いつもあきらめてしまう
㋺ あきらめることが多い
㋩ たいていあきらめない

(5) 授業中，ぼんやりしたり，おしゃべりしたりして，まじめに勉強に打ちこめないときがありますか。
㋑ よくある
㋺ ときどきある
㋩ あまりない

(7) 成績を，もっと上げたいと思いますか。
㋑ 強く思う
㋺ 思う
㋩ あまり思わない

(8) 家（寮や下宿）で，勉強に集中できますか。
㋑ だいたいできる
㋺ ときどきできない
㋩ あまり集中できない

(9) 家（寮や下宿）での勉強時間は，ふつうどのぐらいですか。
㋑ 2時間以上
㋺ 1～2時間
㋩ 30分以下

(10) 宿題を，やればできるのに，やっていくのを忘れることがありますか。
㋑ よくある
㋺ ときどきある
㋩ あまりない

(11) 期末テストのときなどは，しっかり勉強をしますか。（期末テストとは何か知らない人は，ふつうのテストのときで答えてください）
㋑ する
㋺ 少し不足と思う
㋩ ほとんどしない

(19) 勉強にかぎらず，学校生活を真剣にやっていきたいと思いますか。
㋑ 強く思う
㋺ 思う
㋩ あまり思わない

(20) 実際に，真剣にやっていますか。
㋑ やっていると思う
㋺ 少し真剣でない
㋩ 真剣にできない

(21) 自分が悪くて，先生から注意されると，二度と同じ注意をされないようにしたいと思いますか。
㋑ 強く思う
㋺ 思う
㋩ あまり思わない

(22) 実際には，先生から注意されても忘れてしまって，守られないときがありますか。
㋑ よくある
㋺ ときどきある
㋩ あまりない

(23) クラス会や生徒会で，話しあって決まったことは守ろうと思いますか。
㋑ 思う
㋺ できるだけ守ろうと思う
㋩ あまりない

資料1　「生徒理解のための調査　Multi（マルチ）」（一部）

この調査は，生徒の適応感を三つの視点「自己」「対人」「学習」から理解し，それぞれの視点ごとの具体的な指導・援助の手がかりを見い出していくものである。これにより，全ての生徒について，「必要な支援の方向」をより具体的に把握し，これを基に生徒それぞれの持ち味を積極的に引き出していこうと考えた。具体的な調査内容及び調査期日等は，資料2，3の通りである。

視　　点	視点を構成する要素
「自己」 （自己をみつめる）	内的適応感 ①不安感　②自己否定感　③外向性　④行動性
「対人」 （対人関係を考える）	外的適応感 ⑤家庭不適応感　⑥学校不適応感　⑦学級不適応感　⑧規律性
「学習」 （学習についての充実感）	学習適応感 ⑨学習態度（学校）　⑩学習態度（家庭）　⑪学習に対する意欲 ⑫学習に対する自信

資料2　調査の視点及びそれを構成する要素

回	調査期日	調査対象
第6回	平成24年 2月	第6回　全校生徒476名中319名 （現2年生160名　現3年生159名）
第7回	平成24年11月	第7回　全校生徒478名中476名 （1年生160名　2年生158名　3年生158名）

※　学級の諸事情に対応するため，実施期日に幅を持たせた（調査所用時間は30分）
※　1年生は第6回をしていないため，2・3年生のデータを中心に分析している。

資料3　調査時期及び調査対象

2　調査結果の考察

「今後の本校の教育活動及び研究の在り方」という観点から，主として調査結果の評価分布とその推移を捉え考察していく。分析は，大阪心理出版が行い，評価の数値が低いほど，注意が必要な状態であると考えられる。

２年次より，本研究の重点目標と定めた以下の内容に関わる項目について分析を行い，読み取っていく。

重点目標

○　広い視野で物事を客観的に判断したり，問題を解決したりする力を育成する。
○　多様な価値観の社会の中で，自分から他に積極的に働きかける表現力･行動力を育成する。
○　豊かな自尊心・自尊感情を醸成する。

(1)「自己」（自己をみつめる）の視点からの考察

①　概　要

【「自己」の視点】各学年の数値（%）の分布

学　年	回	評　価						
		10~9	8~7	6~5	4	3	2	1
2年生	第6回	23	20	26	9	10	1	1
	第7回	18	32	30	5	11	3	1
	全　国	10	26	34	12	10	5	3
3年生	第6回	25	26	30	8	8	1	3
	第7回	30	24	28	7	4	4	3
	全　国	11	26	33	12	10	5	3

学　年	回	評　価						
		10~9	8~7	6~5	4	3	2	1
1年生	第7回	28	23	30	8	7	4	1
	全　国	14	28	34	10	8	4	1
全　校	第6回	26	28	27	8	8	1	2
	第7回	25	26	29	7	8	4	2
	全　国	12	27	34	11	9	5	3

※　この視点の評価について，数値が低いほど「ゆきづまりを感じている」おそれがあり，全体的に「無気力な感じ」になる傾向があるとされる。

資料４　「自己」（自己をみつめる）の視点からの集計結果

全体的によい評価の数値の割合が多いことから，「気力に満ちた」生活を送っている生徒が多いことが分かる。特に評価が10～９の数値は，全国の分布（本調査は全国で約600の中学校が実施）と比べ大変高い値を示しており，日々の学習や学校行事などに対して前向きに取り組むことができる，リーダー性を備えた生徒が多いと考えられる。第６回から第７回にかけて，数値はわずかながら低い値へ推移しているが，第１回（１年次６月）からの変化を見ると，評価が10～７の数値の合計が37%から51%に増加しており，１年次，２年次に取り組んできた教育活動が効果的に働き，生徒全体の姿としてよりよい状況が形成されているといえる。しかし，第６回から第７回にかけて，２年生の評価が10～９の数値が５%減少しており，全校の評価が２の数値が３%増加（２年生は２%増加，３年生は３%増加）していた。また，評価が１の「ゆきづまりを感じている」生徒が固定化している点などに「自己」の視点から見た課題が捉えられた。

② 各要素について

【「自己」の視点を構成する各要素】全校生徒との数値（%）の分布

要素	回	評価						
		10~9	8~7	6~5	4	3	2	1
①不安感	第6回	32	22	23	9	8	3	3
	第7回	21	22	31	10	8	4	4
	全国	14	23	34	13	8	6	3
②自己否定感	第6回	23	27	31	10	5	2	2
	第7回	20	26	33	9	6	4	1
	全国	11	24	39	12	7	5	2

学年	回	評価				
		5	4	3	2	1
③外向性	第6回	11	30	32	23	4
	第7回	12	32	32	21	3
	全国	8	26	37	23	7
④行動性	第6回	7	24	44	18	7
	第7回	7	20	42	23	8
	全国	8	23	40	22	7

資料5「自己」（自己をみつめる）の視点を構成する各要素の集計結果

「①不安感」「②自己否定感」の要素は，本校の重点目標の『豊かな自尊心・自尊感情』と大きく関わっているものである。「①不安感」の要素は，第6回から第7回にかけて評価の数値が全体的に不安を感じる方へ推移している。生徒は学校生活の中に，学習，進路，人間関係，部活動などについての様々な不安を抱えており，これらの要因が，調査を行う時期によって結果に大きく影響することが考えられる。しかし，第1回からの変化を見ると，数値の上下の変化を繰り返しながら緩やかに不安を感じない方へと推移している（第1回　10～9：11%，8～7：18%）。「②自己否定感」の要素は，第6回から第7回にかけて，全校の数値はわずかに自己否定を感じる方へ推移しているが，学年が上がるにつれて自己否定を感じない状況を示しており，3年生は第6回から第7回にかけて，自己否定を感じない方へと変化していた。自己否定感には対人的な要因も関わると考えられることから，学年が進むことによる人間関係の深まりが評価に影響していることも考えられるが，「①不安感」「②自己否定感」については，過年度までの教育相談や「行く河」の授業を通して，これらを生み出す要因を払拭していく具体的な教育活動の実践が行われているといえる。「③外向性」「④行動性」の要素は，本校の重点目標の『自分から他に積極的に働きかける表現力・行動力』と大きく関わっている。どちらの要素についても，他の項目と比べ評価の値が低く，全国の分布との差が見られない。第1回からの変化もほとんど見られず，わずかに高い値へと推移している。これらのことから，「③外向性」「④行動性」の要素に対しては，同じ「自己」の視点の要素である「①不安感」「②自己否定感」とは異なるアプローチで改善をしていく必要があると考えられる。

(2) 「対人」(対人関係を考える) の視点からの考察

① 概 要

【「対人」の視点】各学年の数値 (%) の分布

学年	回	評価						
		10~9	8~7	6~5	4	3	2	1
2年生	第6回	40	30	20	6	3	2	1
	第7回	31	31	26	5	4	1	2
	全 国	10	26	34	12	10	5	3
3年生	第6回	31	35	21	6	6	1	1
	第7回	36	32	23	5	3	1	1
	全 国	14	28	33	11	7	4	3

学年	回	評価						
		10~9	8~7	6~5	4	3	2	1
1年生	第7回	51	30	14	3	2	0	0
	全 国	26	35	27	6	4	2	1
全校	第6回	39	32	18	6	4	1	1
	第7回	39	31	21	4	3	1	1
	全 国	18	30	31	9	6	4	2

※ この視点の評価が右に偏る集団は，一般的に「対人関係を後退させる」おそれがあり，全体的に「ダレた雰囲気」をもつ傾向があるとされる。

資料6 「対人」(対人関係を考える) の視点からの集計結果

全体的によい評価の数値の割合が多いことから，対人関係を後退させるおそれのある生徒は大変少ないことが分かる。また，評価が10～9の数値の生徒は，全国の分布の2倍以上にのぼる。本校においては，各教科等で他者との「関わり」や「つながり」を重視した「共に学ぶ学習活動」が展開されてきた。このことから，本校ではこれまでのところ，生徒の「対人」という視点からの「共生の力を育む」教育活動が展開され，その効果が現れているものと判断できる。第1回から全ての回において1年生が最も高い値を示し，2年生が最も低い値を示している。これは，発達段階が影響していることも考えられるが，2年生への手立てを講じることが，3年生でのさらなる成長へとつながることを示しているといえる。

② 各要素について

【「対人」の視点を構成する各要素】全校生徒との数値 (%) の分布

要素	回	評価						
		10~9	8~7	6~5	4	3	2	1
⑤家庭不適応感	第6回	26	29	28	10	4	2	1
	第7回	27	31	25	7	5	4	1
	全 国	13	28	33	12	8	4	2
⑥学校不適応感	第6回	33	29	22	7	5	3	1
	第7回	28	32	28	5	4	2	1
	全 国	15	30	32	11	7	4	2

学年	回	評価						
		10~9	8~7	6~5	4	3	2	1
⑦学級不適応感	第6回	32	33	18	10	5	1	2
	第7回	24	41	20	8	4	2	1
	全 国	9	35	30	12	7	5	3
⑧規律性	第6回	30	44	20	4	2	1	0
	第7回	32	42	22	2	1	1	0
	全 国	14	35	33	8	5	4	1

資料7 「対人」(対人関係を考える) の視点を構成する各要素の集計結果

「対人」の視点を構成する各要素の調査結果を見ると，「⑥学校不適応感」を除く要素で評価が10～9の数値の分布が全国の分布と比べ2倍以上も多く，全体的に見れば望ましい状態であると判断できる。「⑥学校不適応感」，「⑦学級不適応感」の要素は，3年生は第6回から7回にかけて値がよい状況へと推移し，2年生はそうではない状況へと推移している。この2要素の変化が「対人」の視点全体の値に大きく影響している。3年生の「⑦学級不適応感」は3学年で最も不適応感が少ない値を示しており，「共生」の力を育むための3年間の授業実践が効果的だったことを読み取ることができる。「⑤家庭不適応感」は全国の分布と比べると，不適応感のある生徒が大変少ない状況を示しており，第1回からの変化も，常に少なくなる方へ推移しているが，学年が進むにつれて多くなる状況を示している。この家庭不適応感について，不安がある数値に推移する状況は，自己の形成過程である第二反抗期の現れであると考えられる。つまり，この要

素が全国の分布と比較して不適応感が少ない状況を示していることは，裏を返せば，本校の生徒が自己を形成し確立していく時期がやや遅い傾向があるともいえる。すなわち，先に述べた，「自己」（自己をみつめる）の視点に関する要素が育っていないことの現れであり，それが顕著に表れているのが「④行動性」の要素であるといえる。親や教師の指示や社会のきまりなどを疑問に思ったり，批判的に考えたりすることをせず，自らの考えで行動する力が弱いという，本校の生徒の特徴が現れているといえる。「⑧規律性」についても，「⑤家庭不適応感」と同様のことが考えられる。本来，規律性と自主性は両立することが望ましい状態であると考える。さらに，規律の上に望ましい自主性を育てていくことが理想的であると考えた時，本校の生徒は，高い規律性が育っており，今後はさらに，その上に育つべき望ましい自主性のための研究をしていかなければいけない。

(3) 「学習」（学習についての充実感）の視点からの考察

① 概　要

【「学習」の視点】各学年の数値（%）の分布

学年	回	評価						
		10~9	8~7	6~5	4	3	2	1
2年生	第6回	28	35	32	2	2	1	0
	第7回	22	35	33	6	3	1	1
	全　国	10	26	38	9	9	4	3
3年生	第6回	23	34	30	7	6	0	1
	第7回	30	32	27	5	5	1	0
	全　国	10	26	37	10	9	4	3

学年	回	評価						
		10~9	8~7	6~5	4	3	2	1
1年生	第7回	34	43	19	3	1	0	0
	全　国	17	35	33	6	5	2	2
全校	第6回	27	37	28	4	3	1	0
	第7回	29	37	26	4	3	1	0
	全　国	12	29	36	8	8	4	3

※　この視点の評価が低い方に偏る集団は，一般的に「学習不足」のおそれがあるとされる。また，この視点の調査結果は，「自己」及び「対人」の調査結果と無関係ではないと考えられる。

資料８　「学習」（学習についての充実感）の視点からの集計結果

全体的によい評価の数値の割合が多いことから，本校において学習不足に陥っている生徒は少ないことが分かる。本校の生徒は，学習に対する意識が高く，その中で充実感を得られているということは，望ましい状況で学習が進められているといえる。また，学習に対する意識が高い分「自己」，「対人」の結果に与える影響も大きいと考えられるため，評価の数値が４以下の低い生徒については，早急な改善が必要である。３年生は，第５回から第６回，第７回と数値が高い値へと推移しており，進路の実現に向け，充実した学習状況であるといえる。２年生は評価の数値が低い方へと推移している。過去の調査でも，２年生は同様の傾向が見られ，その原因としては，学習内容が難しくなることや，学校生活全体の中だるみの状態などが考えられてきた。３年生になってからの伸びをより大きくするためにも，２年生における学習内容の習得や，学習意欲の持続のための具体的な手立てを実践していかなければいけない。

② 各要素について

【「学習」の視点を構成する各要素】全校生徒との数値（%）の分布

要素	回	評価						
		10~9	8~7	6~5	4	3	2	1
⑨学習態度(学校)	第6回	29	39	18	7	4	2	1
	第7回	30	36	21	5	5	1	1
	全国	14	31	31	9	7	4	3
⑩学習態度(家庭)	第6回	19	35	31	7	4	3	1
	第7回	17	29	33	15	7	6	3
	全国	7	29	33	15	7	6	3

学年	回	評価						
		10~9	8~7	6~5	4	3	2	1
⑪学習に対する意欲	第6回	32	33	18	10	5	1	2
	第7回	24	41	20	8	4	2	1
	全国	9	35	30	12	7	5	3
⑫学習に対する自信	第6回	30	44	20	4	2	1	0
	第7回	32	42	22	2	1	1	0
	全国	14	35	33	8	5	4	1

資料９ 「学習」（学習についての充実感）の視点を構成する各要素の集計結果

第６回から第７回にかけてだけでみると「⑫学習に対する自信」を除く要素については，評価が10～９の数値が減少している。「学習態度」「学習意欲」「学習に対する自信」の要素が負のスパイラルとなっていることが考えられる。しかし，３年生だけで見ると，第１回目からの長い期間での変化を見ると，数値の上下の変化を繰り返しながらほぼ同じ値を示している状態である。また，どの年次で見ても，年次後半に低い値を示していることから，新学年スタートの時期の，意欲的に学習に取り組もうという気持ちが，時間の経過や，思うように学習が進まないことなどの原因により意欲や態度の評価の低下につながっていると思われる。このような生徒の実態を踏まえ，教師は，生徒の学習意欲を喚起させる手立てや計画を，授業レベルや単元レベルで準備することはもちろん，年間を見通して準備しておかなければならないと考える。

３ まとめ

生徒の実態調査の結果は，本校の教育活動に対する評価と捉えることができる。研究最終年次である今回は，短期間の変化だけでなく第１回からの変化についても分析を行った結果，３年間の本研究による生徒の成長や，新たな課題などが明らかになってきた。本研究をスタートしたとき，本校の生徒には「自分に対する不安感を抱いている生徒が多く，そのために，自分のもっている能力を十分に発揮できていない」という問題を抱えていると分析をしていた。これを払拭するために，各教科領域ごとに研究を進め実践を行った結果，関連する「自己」の視点を構成する要素の評価が高い値へと推移し，その効果が実証されたといえる。また，「対人」の視点を構成する要素である「不適応感」を示す値がよりよい状況へ推移しているということは，「共生の力」の高まりとともに，「豊かな自尊心・自尊感情の醸成」にもよい影響を与えているといえる。しかしながら，重点目標としていた内容のうち，「自ら他に積極的に働きかける表現力・行動力の育成」については，関連する要素の評価の値に変化が見られず，さらなる研究が必要であることが分かった。また，「自己」「対人」「学習」の相互補完的な高まりについても，互いに関連する要素のより具体的な捉えや，さらに多面的な捉えをする必要がある。

第２章　学校評価アンケートの考察

１　はじめに

本校では，持続可能な社会を築くための，自立と共生の力をもつ生徒を育てる学校づくりを推進していくために，地域や関係機関，家庭，学校評議員や第三者評価委員などの協力や支援のもと，学校評価を行いその結果を踏まえて，学校改善に取り組んできた。以下に，学校評価の結果を受けて行った改善策と研究との関連と，学校評価の基礎資料とするために教員・生徒・保護者に行ったアンケートの結果についての考察を述べ，３か年の研究について振り返りたいと思う。

２　研究推進に関わる学校評価と学校改善の取組

(1)　１年次・２年次の取組

３か年の研究１年次には，自己評価において，重点目標に対しての具体的な評価の指針を立てるとともに，それを達成するための具現策を決定し，その達成状況を問う４段階評価のアンケートを教員・保護者・生徒対象に実施した。また，教員がそれぞれの具現策について自由に記述することでその実施状況や実施に伴う成果と課題などを集約した。そして，アンケートの結果や自由記述を集約したものを基礎資料として教員全員で協議・考察したものを自己評価とした。研究２年次には，１年次の結果を踏まえて重点目標の見直しを行い，新たな重点目標を決定し，自己評価の指針や具現策，アンケートの質問項目を大幅に変更した。

(2)　今年次の取組

今年次は，２年次までで明らかになった研究の成果と課題，学校評価の結果を基に，２年次と同じ重点目標を掲げ研究を進めることになった。そこで，教員による自己評価アンケート・生徒による学校生活についてのアンケート・保護者による学校の取組についてのアンケートの内容は本校の重点目標に対応させて行った２年次のアンケートとほぼ同じものにして，２年間の変容を把握できるようにした。（表１）また，教員の自己評価の指針から目標達成のための方策を具体的に決め，全教員が共通理解した上で改善に向けて取り組んだ。特に，２年次の研究・実践を通して課題が残った「豊かな自尊心・自尊感情を醸成する。」という目標に対しては，表１の具体的な目標⑧～⑪を達成するための方策を次のように考え，研究を進めていく上でも，全教科領域を通して必ずアプローチすることにした。

【目標達成のための方策】

目標⑧「理想の自分や社会の姿を思い描く力を育成する。」について
- ○　道徳教育や学級活動，行く河の時間の充実を図る。
- ○　図書室の有効活用と言語活動の充実を図る。

目標⑨「自分の気持ちや考えを表現し，伝える力を育成する。」について
- ○　青葉写生会，卒業記念音楽会など表現の場の充実を図る。
- ○　自主協働学習，探究など学習発表の機会を設定する。
- ○　校内外の大会や作品展等での活躍の紹介をする。

目標⑩「互いの個性を尊重する力を育成する。」について
- ○　道徳教育の充実を図る。

目標⑪「社会の形成者としての自覚をもち，他と協調しながら自ら進んで行動する力を育成する。」について
- ○　キャリア教育の充実を図る。

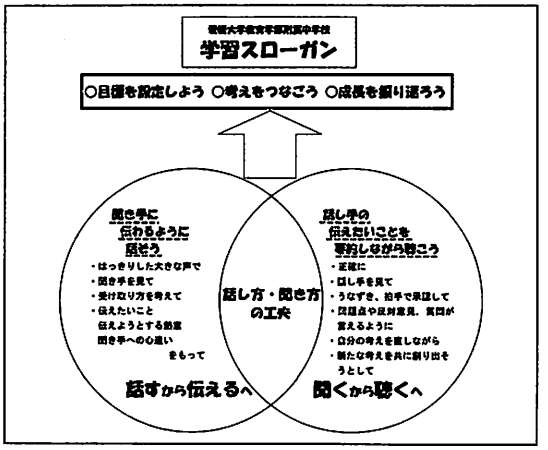
今年次の７月には，教員による自己評価を行った。その結果（表１）を受けて，評価の平均が低かった項目について考察し，改善への具体的な取組を協議し実施した。その一部を紹介する。

〈目標①「広い視野で物事を客観的に判断する力を育成する。」に対して〉

４月に決めた目標達成のための方策……「学習スローガン」（資料１）の実現を目指した取組（考えをつなぐ学習の実現）を行う。

○　学校として何に重点を置いて伸ばそうとしているのか具現化するべきだと考え，本校が掲げている「学習スローガン」の“考えをつなぐ学習”の実現を目指して，「学習スローガン」をさらに意識した取組を充実させていくことを全教員で意識統一した。

○　各教科・教員の取組を互いに理解するために，１年次からの研究成果等を確認し，研究内容が分かりやすい学習指導案，研究紀要の作成を行った。その後の校内研修授業は，必ず，グループ全員で指導案審議，授業研究，研究協議を行った。



資料１　学習スローガンと話し方・聞き方の工夫

〈目標⑥「解決の過程や結果を振り返って修正･改善する力を育成する。」に対して〉

４月に決めた目標達成のための方策……「学習スローガン」の実現を目指した取組を行う。学校行事や学級活動の反省など，成長を振り返る機会を設定する。

○　自己評価する場や評価場面の工夫が必要だと考え，総合的な学習の時間においては，目標設定場面を充実させ，振り返りの時間を確保するために，終礼を５分延長して学習の振り返りをさせた。

○　各教員が，効果的・効率的な評価の研究を行った昨年度の研究成果を踏まえ，自己評価や成長を振り返る機会の設定などで取組の充実を図り，さらに効果的･効率的な評価研究を行った。

〈目標⑧「理想の自分や社会を思い描く力を育成する。」に対して〉

４月に決めた目標達成のための方策……道徳教育や学級活動，行く河の時間の充実を図る。図書室の有効活用と言語活動の充実を図る。

○　９月中に全教員が，生徒の活動している時間に図書室に行き，生徒の様子を見たり，理想の自分や社会を思い描く力の育成に活用できそうな本や場面を考えたりする機会をもつことにした。

○　見通しをもって物事に取り組むような指導が行えるように，行事や総合的な学習の時間等において，目標設定及び評価場面を充実させる取組を行った。

上の３つの取組以外にも，各個人研究の中で全体として指導が行えていないところを意識して実践することや，日々の各場面の指導において，課題を意識して意図的な指導を行うことについて共通理解をした。これらの取組は，本校の研究推進につながっていった。

表１　学校評価のための生徒・保護者・教員アンケート集計結果（３年次）

学校教育目標 重点目標	具体的な目標	生徒・保護者アンケートの質問内容 教員の具体的な評価の指針		評価した人数（人）				評価の平均
				評価４	評価３	評価２	評価１	
１　広い視野で物事を客観的に判断したり，問題を自力解決したりする力を育成する。	①　広い視野で，物事を客観的に判断する力を育成する。	生　徒	私は，何かを決めるとき，いろいろな面や立場から考えて正しい判断ができるようにしている。	145	284	39	4	3.21
		保護者	学校は，生徒が物事をいろいろな面や立場から考えて正しい判断ができるように指導している。	175	208	32	0	3.34
		教　員	物事をいろいろな面から考えて判断できるような指導が行えたか。	1	19	2	0	2.95
	②　問題の本質を見抜く力を育成する。	生　徒	私は，授業の内容が分かるように，また，授業でいろいろなことができるように積極的に学習している。	175	241	54	5	3.23
		保護者	学校は，授業の内容が分かるように，また，授業でいろいろなことができるように学習指導を行っている。	157	220	36	0	3.29
		教　員	問題の根本を考えて捉えられるような指導が行えたか。	6	13	3	0	3.14
	③　実現に向け粘り強くチャレンジし続ける力を育成する。	生　徒	私は，学習や部活動で自分の目標を達成するまで，粘り強く取り組んでいる。	218	212	41	3	3.36
		保護者	学校は，学習や部活動で，生徒が自分の目標を達成するまで，粘り強く努力するように指導している。	150	202	57	3	3.21
		教　員	問題の実現に向けて努力し続ける支援が行えたか。	5	12	5	0	3.00
	④　現在，そして将来にわたり社会的・経済的に公正な社会を築こうとする力を育成する。	生　徒	私は，附属中生として校内外のルールやマナーを守って生活できている。	270	192	10	2	3.54
		保護者	学校は，生徒が公正な学校生活や社会生活が送れるように，校内外のルールやマナーを守って生活するように指導している。	219	185	12	1	3.49
		教　員	公正な学校生活が送ることができるような指導が行えたか。	3	11	8	0	2.77
２　多様な価値観の社会で，自分から積極的に働きかける表現力・行動力を育成する。	⑤　課題解決に向けて，自ら考え，見通しをもって解決する力を育成する。	生　徒	私は，授業や行事に向けての活動で，目標を設定し，その解決方法を考え工夫して取り組んでいる。	161	258	54	1	3.22
		保護者	学校は，授業や行事に向けての活動で，生徒が目標を設定し，その解決方法を考え工夫して取り組むように指導している。	200	194	15	0	3.45
		教　員	課題解決の道筋を考えられるような指導が行えたか。	3	17	2	0	3.05
	⑥　解決の過程や結果を振り返って修正・改善する力を育成する。	生　徒	私は，授業や行事や生徒会活動などの取組を振り返って次の学習や活動に生かしている。	138	263	72	2	3.13
		保護者	学校は，授業や行事や生徒会活動などの取組を振り返る機会をつくり，生徒が次の学習や活動に生かせるように指導している。	165	223	24	0	3.34
		教　員	適切に自己評価することができるような指導が行えたか。	3	15	4	0	2.95
	⑦　多様な価値観を認める力を育成する。	生　徒	私は，授業やいろいろな活動の中で，自分と異なる考えを知ってそのよさを取り入れようとしている。	233	217	24	0	3.44
		保護者	学校は，授業やいろいろな活動の中で，生徒が自分と異なる考えを知って，そのよさを取り入れようとするように指導している。	147	223	27	2	3.29
		教　員	自分と異なる考えや思いを理解できるような指導が行えたか。	5	13	4	0	3.05
３　豊かな自尊心・自尊感情を醸成する。	⑧　理想の自分や社会の姿を思い描く力を育成する。	生　徒	私は，希望する将来の社会やよりよい自分の姿を目指し，見通しをもって行動している。	171	232	59	12	3.19
		保護者	学校は，生徒が希望する将来の社会やよりよい自分の姿を目指し，見通しをもって行動できるように指導している。	123	210	63	3	3.14
		教　員	見通しをもって物事に取り組むような指導が行えたか。（よりよい自分の姿を追い求めていけるような指導が行えたか。）	1	14	7	0	2.73
	⑨　自分の気持ちや考えを表現し，伝える力を育成する。	生　徒	私は，授業やいろいろな活動で，失敗や間違いをおそれずに，自分の気持ちや考えを言葉や行動で表している。	132	247	90	6	3.06
		保護者	学校は，授業やいろいろな活動で，生徒が失敗や間違いをおそれずに，自分の気持ちや考えを表現できるように指導している。	121	229	50	6	3.15
		教　員	適切な自己表現ができるような指導が行えたか。（「失敗」や「間違い」を大切にした指導が行えたか。）	7	13	2	0	3.23
	⑩　互いの個性を尊重する力を育成する。	生　徒	私は，校内外の生活の場面で，周りの人たちの考えや思いを大切にしようと努めている。	254	197	20	1	3.49
		保護者	学校は，授業や学校生活の場面で，生徒が周りの人たちの考えや思いを大切にできるように指導している。	165	209	28	1	3.33
		教　員	他者の思いや考えを理解できるような指導が行えたか。	1	17	4	0	2.86
	⑪　社会の形成者としての自覚をもち，他と協調しながら自ら進んで行動する力を育成する。	生　徒	私は，学級や附属中，または社会の一員として，授業やいろいろな活動に積極的に取り組んでいる。	190	243	38	2	3.31
		保護者	学校は，生徒が学級や附属中，または社会の一員として，授業やいろいろな活動に積極的に取り組めるように指導している。	205	184	19	2	3.44
		教　員	社会の一員として前向きに取り組む姿勢を心がけさせるような指導が行えたか。	6	13	3	0	3.14

4　研究実践の内容を広く発信・公開し，教員・教育実習生の指導力の向上を図る。	⑫　愛媛大学教育学部教員と連携を図り，教育研究を協力して推進する。	教　員	「未来を拓く力の育成」を目指して，共同研究に取り組めたか。	9	11	2	0	3.32
	⑬　学部教員と連携し，学部学生の教員としての指導力の向上を図る。	教　員	学部学生の教員としての指導力を高めるような指導が行えたか。	5	14	3	0	3.09
	⑭　地域との連携を図り，地域の教員に対して研修の場を提供する。	教　員	地域の学校に研究成果などの情報発信をし，開かれた学校づくりを進められたか。	5	14	3	0	3.09

生　徒　（回答：全校生徒475名，平成24年10月１日実施）
保護者　（回答：保護者417名，平成24年10月初旬実施）
教　員　（回答：教員22名，平成24年７月実施）

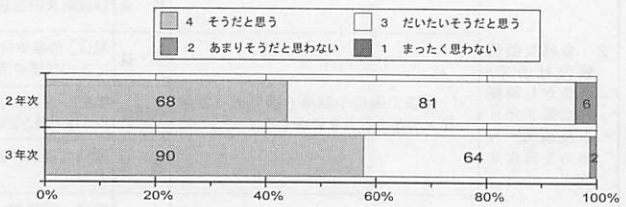
評価４：そうだと思う
評価３：だいたいそうだと思う
評価２：あまりそうだとは思わない
評価１：まったく思わない

３　アンケートの結果から

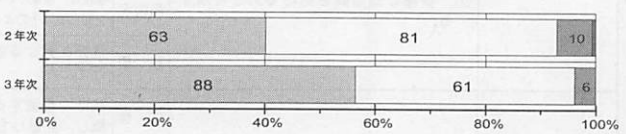
今年次の10月に実施した生徒・保護者によるアンケートでは，全ての質問内容に対して評価の平均が４段階評価で３以上であった。（表１）このことは，これまでに取り組んできた研究や実践の成果が現れたものだと考えられる。また，生徒のアンケート結果の中には，質問内容④の「私は附属中生として校内外のルールやマナーを守って生活できている。」の評価の平均が3.54で，質問内容⑩の「私は，校内外の生活の場面で，周りの人たちの考えや思いを大切にしようと努めている。」の評価の平均が3.49であるというように，教員の自己評価では平均が３未満であるにもかかわらず，高い評価が出ている項目もあった。それらの項目について，現３年生の２年次（平成23年11月実施）と３年次（平成24年10月実施）の結果を比較してみると，３年次の方がより高い評価になっていることが分かる。（資料２・３）教員の自己評価が低い項目は，具体的な目標を達成するのが難しい項目であるということで，研究の１年次から継続して全教員が指導に力を入れて取り組んできていることが，生徒のアンケートの結果として現れたのだと思われる。

先に紹介した具体的な目標⑥や⑧などについても，現３年生の２年次のアンケート結果と今年次の結果とを比較すると，３年次の方が高く評価されていることが分かる。（資料４・５）これらの項目についても，学校評価の結果を受けて改善策を検討し，全教員が共通理解のもと，取り組んできた成果が出てきたものだと考える。

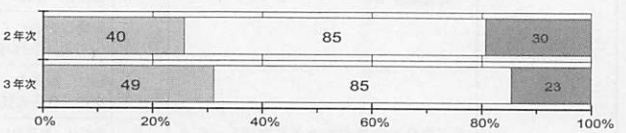
さらに，今年次は「豊かな自尊心・自尊感情を醸成する。」という重点目標を達成するための方策を決め，全教員で取り組んだことで，２年次のアンケートで教員・生徒・保護者ともに低い評価であった質問内容⑦「私は，授業やいろいろな活動の中で，自分と異なる考えを知ってそのよさを取り入れようとしている。」に対する評価が２年次よりも上がり平均3.44となるなど成果を十分に上げることができた。



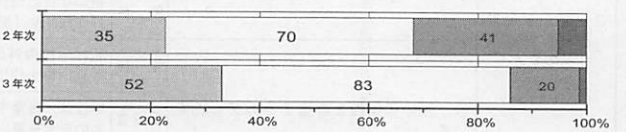
資料２　生徒アンケート　質問内容④



資料３　生徒アンケート　質問内容⑩



資料４　生徒アンケート　質問内容⑥



資料５　生徒アンケート　質問内容⑧

４　おわりに

学校評価のための基礎資料や，学校評価の結果を受けての改善への取組を，研究のＰＤＣＡサイクルの中に取り込み実践を積み重ねることで，持続可能な社会を築くための，自立と共生の力を育むことができた。今後，各領域で成果の上がった取組を継続・改善していきたいと思う。

第３章　研究のまとめ

１　３年次研究のまとめ

資料１は，１，２年次の研究の成果と課題を集約し，学校全体として定めた研究の重点目標である。資料２は，これらの重点目標に資するために各教科領域別研究において設定した指導の工夫（一部）をまとめたものである。なお，資料１で掲げたものは，それぞれが相互補完的に高まっていくものである。したがって，資料２に記載している指導の工夫についても，各教科領域の頁で述べられている通り，それぞれが多くの育ちにつながっている場合がほとんどである。ここでは，各教科領域で共通した指導における留意点等を見出すために分類し記載している。

【重点目標】
１　広い視野で物事を客観的に判断したり，問題を自力解決したりする力の育成
２　多様な価値観の社会で，自分から他に積極的に働きかける表現力・行動力の育成
３　豊かな自尊心・自尊感情の醸成

資料１　研究の重点目標

教科領域	設定した指導の工夫（一部）		
	重点目標１	重点目標２	重点目標３
国語	○　多様な古典教材の活用 ○　情景（和歌）を具体的に想像させる学習活動	○　話す，書く活動を重視した交流活動 ○　創作活動と鑑賞活動の有機的な関連 ○　辞書の有効活用	○　作品や考えについて，互いにアドバイスをし合ったり，認め合ったりする活動の充実
社会	○　習得及び活用させたい概念や技能を明確にした単元計画の作成 ○　課題意識を高める単元導入時及び問いの工夫	○　定型文，表，コミュニケーションボード，イメージ画等による表現活動及びそれらを活用した関わり合う活動の充実	○　学習過程や成果の可視化とその有効活用 ○　自分の成長を振り返る場面の効果的な設定
数学	○　フリークライミング学習の充実やネーミングによる見方や考え方の視覚化 ○　解決の見通しや追究の過程及び結果を説明する場面の充実	○　付せん紙やホワイトボード，ウルトラコミュニケーションボードを活用した見方や考え方を表現する活動 ○　協働して学習する場面の効果的な設定	○　互いの考えを表出（説明）し合い共有化する場面の充実 ○　自他のよい点を振り返る活動の工夫・充実
理科	○　思考の流れを大切にした単元計画の設定 ○　生徒自作の教材を使った学習活動の展開 ○　多種多様な教材の活用	○　モデルやコミュニケーションボードを活用した，自分の考えを他者に説明する学習活動の工夫	○　検証実験などを取り入れた自己評価場面の充実とその効果的な設定 ○　学びの過程や自己の成長を見つめ直す場の設定
音楽	○　題材及びその構成の工夫 ○　グループ活動の充実	○　互いの考えを伝え合う活動の工夫	○　他から認められる場の設定
美術	○　抽象的な表現を通した感性トレーニング	○　生徒相互の情報交換の場の設定	○　偶然性をもつ技法での抽象表現 ○　作品にオリジナリティを出させる工夫
保健体育	○　体育の本質的な魅力の再考	○　単元構造図による指導内容と学習の流れ，評価機会の検討	○　集団やチームへの貢献感を感じることができる教材や場の工夫

技　術	○　確実に知識や技能を習得させる手立て及びそれを活用させる課題設定の工夫 ○　情報携帯端末及びe-Learningの活用	○　複数の答えのある課題設定とそれを共有する場面の効果的な設定 ○　ジグソー学習の手法を用いた関わり合いの場面の工夫	○　学級全体での発表場面及び互いを称揚する場面の設定 ○　他者の説明を聞く姿勢についての指導の充実
家　庭	○　問題解決的な学習の展開	○　高校生との授業 ○　自分の考えを明確にする手立ての工夫	○　互いの考えを伝え合う活動の工夫
英　語	○　発問や学習活動の目的及び内容の視覚化 ○　テーマ設定及びワークシートの工夫	○　多様な表現や考えに触れさせるための学習形態の工夫 ○　意欲的に自己表現する発問の工夫，場の設定	○　相互評価場面の充実 ○　コメントカードの工夫
行く河	○　自己解決する楽しさを感じさせる場の設定 ○　習得する知識や技能の明確化及び単元構成の工夫	○　批判的な思考力を活用する場面の設定	○　体験的な学習活動の充実 ○　多くの生徒に表現させる場の設定

資料２　各教科領域で設定した指導の工夫（一部）

資料２の指導の工夫は一部であるため，詳細は各教科領域の頁を参照していただきたいが，複数の教科領域で同様の指導の工夫が設定されていることは注目すべき点である。それらは，生徒を育てる上で非常に重要なものだと考える。複数の教科領域で見られた【指導の工夫】と，各教科領域の研究成果から生徒の確かな育ちにつながる【キーワード】を次のようにまとめた。

1　広い視野で物事を客観的に判断したり，問題を自力解決したりする力の育成
【指導の工夫】 ①　何をどのように習得・活用させるのかを明確にした指導計画の作成 ②　多様性に触れることのできる題材や問い及び学習活動の工夫 ③　多面的・多角的な思考を促す手立ての工夫 ④　見方や考え方を表現し合ったり，比較し合ったりする学習活動の設定 ⑤　単元導入時に強い課題意識をもたせる題材や課題等の工夫 ⑥　追究意欲を持続させる単元構成及びその手立ての工夫 ⑦　見方や考え方，技能等の確実な習得とそれを活用しやすくする手立ての工夫
【キーワード】 ○　多様に見たり考えたりさせる　○　見方や考え方，イメージを表現させる ○　課題意識を高める　○　解決の見通しをもたせる　○　スモールステップで解決させる ○　習得したものを活用しやすくする　○　成功体験を積み重ねさせる（その理由を明確にさせる）

資料３　重点目標１について

2　多様な価値観の社会で，自分から他に積極的に働きかける表現力・行動力の育成
【指導の工夫】 ①　自分の考えに根拠をもたせる手立ての工夫 ②　思考の過程や結果を可視化する学習ツールの開発とその効果的な活用 ③　表現活動の楽しさや有用性を味わわせる課題設定や授業展開の工夫 ④　場面に応じた相手意識を育成できる多様な関わり合う場面の設定 ⑤　自他のよさ及び失敗や間違いを生かすことのできる学習活動の工夫及び集団づくり
【キーワード】 ○　教師・生徒ともに表現活動のねらいを明確にする　○　思考の過程や結果を可視化させる ○　多様性を実感できる関わり合いの場面を設定する　○　質の高い表現活動を積み重ねさせる

資料４　重点目標２について

3　豊かな自尊心・自尊感情の醸成
【指導の工夫】 ①　よさや違いを伝え合う活動の充実とその効果的な設定 ②　できる，できた，分かった，分かってもらえた，などの実感を伴う学習活動の工夫 ③　効果的な教師の評価と成長を実感できる自己評価場面の工夫・充実 ④　自己の学習成果を他者が活用する学習活動の設定
【キーワード】 ○　学習集団の支持的な風土を醸成する　○　学習目標を吟味する（個に応じた学習目標の設定など） ○　成功体験及び他者から認めてもらう経験を積み重ねさせる

資料５　重点目標３について

これらの「自立と共生」の力を育む指導が各教科領域で展開された結果，「自立と共生」の力を発揮する生徒の姿が随所に見られた。その一端を以下に示す。

○　新しいことに挑戦しようとしたり，学んだことを活用してみようとしたりする姿
○　ある教科で学んだことを違う教科等の学習と関連付けたり，生かしたりしている姿
○　学んだことを活用しながら，粘り強く追究するとともに，習得したものを活用していく中で，見方や考え方，技能をさらに成長させ，そのことを自ら実感している姿
○　自分なりの見方や考え方，学習の成果，自分のよさや成長したところなどを恥ずかしがらずに小集団や全体の場で堂々と述べている姿
○　自分の考えや作品などについて，そのよさや他者との同異を見いだしたり，優れた部分を取り入れようとしたりすることが自然とできている姿
○　他者との関わり合いの中で，不明な点を積極的に質問するとともに，共に解決しようとする姿
○　上手く表現できないときに，表現の内容や方法を成長させようと，追究し直したり，表現方法を工夫したりして，よりよく伝えようと努力する姿

これらは，各教科領域の研究実践の中で述べられている姿であり，ごく一部を抜粋したものに過ぎない。前章までで語られている通り，実際の学校生活の中では様々な育ちを見せている。本紙の冒頭，基本構想の中で「本校の生徒は，失敗を恐れたり，自分に対して自信がなかったりして，積極的に行動できないのではないか」との旨を述べた。この私たちの課題意識に対する一つの成果は，次のような生徒の姿に現れている。３年生のＡさん（研究１年次である平成22年度に入学）が，「生徒会退任のあいさつだからあらかじめ用意するのではなく，そのとき感じたり，考えたことを話すほうがいいと思った」との理由で，全校生徒の前でのあいさつを言葉につまりながらも熱っぽく語っていた。Ａさんは，資料６の問１で１年時には，自分の考えを表現することが好きではないと回答している。

（問１）自分の考えを表現すること，（問２）他者の考えを聞くこと，について	
「どちらも好きである」と回答	１年時（40%）→３年時（82%）
「どちらも自分の成長に役立っている」と回答	１年時（62%）→３年時（91%）
（問３）自分の考えを表現すること，について	
「自分の考えが友達の役に立っている」と回答	１年時（12%）→３年時（69%）

資料６　３年生へのアンケートの回答より（H22年,H24年，ともに10月に実施）

Ａさんや資料６の３年生全体の変容は，私たちが３年間「自立と共生の力を育む指導」について研究・実践を積み重ね，その精度を上げてきた成果だと考える。

２　３年間の研究のまとめ

３年間の主な研究成果は以下の通りである。

研究年次	○ 研　究　方　法 ◎ 主　な　研　究　成　果
１年次	○　各教員が，研究主題を具現化し，研究テーマを設定する。一つの研究に対して，教育学部大学教員１名以上と共同研究を進める。
	◎　「自立と共生の力」を育む上で効果的な学習指導方法を明らかにした。 ◎　本校生徒の実態に応じた「自立と共生の力」とは何かを明確にした。
２年次	○　１年次の研究の成果と課題を集約し，学校全体としての研究の重点目標を決め，焦点化していく。これを基に，研究の深化を図る。 ○　各教科領域の研究テーマに対する評価を行い，研究をよりよいものにしていくとともに学校の研究主題に対する研究の評価内容や方法を検討する。
	◎　本校生徒の実態から「自立と共生の力」を育む上でさらに指導の効果を上げるための要素を明確にした。 ◎　「自立と共生の力」を育む上で有効な指導と評価について研究が進み，研究・実践におけるＰＤＣＡサイクルが充実した。
３年次	○　２年次の研究成果と課題を基に，さらに研究の深化・統合を図る。 ○　学校の研究主題に対する研究の評価を行う。
	◎　「自立と共生の力」を育む質の高い学習指導が各教科領域で実践された。 ◎　生徒の確かな育ちを保障する上で重要となる事柄を明らかにした。

前述の通り，３年間各教科領域で様々な学習指導の在り方について研究・実践を進めてきた結果，生徒の確かな育ちを見取ることができた。この一番のポイントは，研究が進むにつれ，各教科領域ともに「何のための学習活動か」をより明確にし，その精度を上げていったことにあると言える。「何をどうすることが本校生徒の○○を育てることにつながるのか」「○○を育てるためにはこれでよいか」「そもそも○○とは」「○○は本当に育ったのか」など，「○○を育てるために」を常に意識し，そして生徒の育ちの姿にこだわってこの３年間研究を進めてきた。また，「何のためか」については，生徒にも分かりやすい言葉で各教科領域の学習活動ごとに語られてきた。教師，生徒ともに「何のためか」を理解した学習活動の重要性は既に明らかとなっているが，生徒の姿からそれを実感することができた。この意味において，育てたい「自立と共生の力」について，本校生徒の実態から重点目標を定めて研究を進めてきたことも，一定の有効性が認められると言える。

今後の研究については，例えば，「持続可能性」に目を向けた学習内容についての研究や「自立と共生の力」を一層効果的に育む学習指導方法の研究など，本年次までの研究をより深化させるという方向性が考えられる。一方で，研究主題を一新し，新たな着眼点の下に研究を進めることも考えられる。いずれにしろ本年次までの研究成果を生かすとともに「これからの社会に必要な」という長期的な視点と「今，本校の生徒に必要な」という短期的な視点を併せもって研究を進めていくことが重要である。また，前述の資料６問３の数値がやや低いことや実態調査において伸び悩んでいる生徒がいることを重視しなければならない。研究の内容そして方法ともに充実させ，「すべての生徒が確かに育つ魅力的な」学校であるべく研究・実践を進めていきたい。

お わ り に

３か年継続研究の３年次、まとめとしての研究成果をこのような形で多くの皆様方のおかげで報告することができました。このことにまず感謝申し上げたく存じます。大学においては、５校の附属学校園の共通教育理念「未来を拓く人材の育成」を昨年度末に確立し、今年度は各校がそれに基づく、教育目標の策定に取り組んでおります。このような流れをしっかり踏まえての研究の取組でもございました。本校では、未来を拓く人材育成のために必要な力を「自立と共生の力」と捉え、さらに具体的に「判断力、問題解決能力（重点目標１）」「表現力･行動力（重点目標２）」「自尊心・自尊感情（重点目標３）」と分析しました。これらの諸能力を育成するために、全教員が一丸となり、９教科と１領域で研究を推進いたしました。

私たちの研究は、第一に目の前にいる学校の宝である生徒たちの実態からスタートいたしました。教師の授業力の根幹を「生徒理解力」と考えたからです。生徒を多面的、多角的に捉えます。人間にはよい面、悪い面が混交しております。これらすべてをまるごと捉えることにより、生徒たちの真の実態に近づこうと努力いたしました。これらが明確になったからこそ、しっかりとした研究推進計画が立案できます。とにかく１時間１時間の授業、生徒と教師、生徒たちと教師がそれぞれ織りなす知の織りあわせを大切にいたしました。取組の一端を６月末から９月までの間に「授業研究の部」として発表いたしました。この成果と課題をもとに、その後の肉づけを行いました。その間、要所要所で大学の先生方、公立学校の先生方の適切なご指導、ご支援を賜りました。心から感謝いたします。日々の地道な授業実践をもとに、評価、改善、新たな工夫を繰り返し、取り組みました。

来年度、平成25年度は「第２期教育振興基本計画」がスタートします。キーワードとして掲げられておりますことは「自立、協働、創造」です。私どもが取り組んでまいりました３年間の研究は、この先取りであることを自負いたしております。まだまだ拙いものではありますが、先行しての提案であると思います。生徒個人で捉えたとき、まず一人一人の自己の考えをしっかりもつことができること、すなわち思考・判断する力が必要です。その考えは独善的であるかもしれません。だからみんなに問いかけます。表現力、行動力が必要となります。みんなと積極的に関わり、自己の考えをみんなとの関わりというフィルターを通して、よりよいものへと再構築していきます。つまり、新たなるものの創造へとつながるわけです。これらの営みが生徒個人と、生徒たちの集団・社会の中で営々と築かれゆく中で、自己の存在に確固とした自信をもつこととなります。その自信は、モノローグ的のみではなく、ディアローグ的にも得られます。生徒個人の自己満足ではなく、生徒たちの集団・社会の中で認められたものであるからです。これこそが真の自尊心・自尊感情と考えます。どうか厳しくご指導を賜りたく存じます。頂戴いたしました至宝のご指導をもとに、生徒たちがさらに成長する実践研究、モデルに値するものとなるよう、努力を続けますことを誓います。

これまで心温まるご指導を賜りました、愛媛県教育委員会様、各市町教育委員会様、愛媛県教育研究協議会様、各公立諸学校様に対し、甚深の謝意を改めて申し上げ、おわりのことばにかえさせていただきます。

平成25年２月

愛媛大学教育学部附属中学校　副校長　齋　藤　照　夫

研究アドバイザー

愛媛大学農学部　小林　修

愛媛大学教育学部　井上　洋一・張　貴民・向　平和

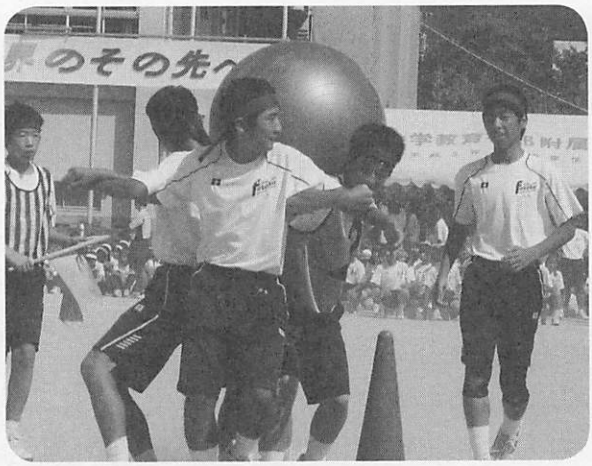
研究同人及び共同研究者

校　長　平松　義樹　　副校長　齋藤　照夫

教科領域	研　究　同　人	共同研究者（愛媛大学教育学部）
国　語	梅木　香織・大上　航太 竹縄　隆子	太田　亮・小助川元太・佐藤　栄作
社　会	田中　寿佳・西田　剛志 宮本　真人	鴛原　進・魁生由美子・川岡　勉・川瀬久美子 壽　卓三・張　貴民・中曽　久雄・福田　喜彦 松野尾　裕・森　貴子・矢澤　知行
数　学	赤松　結美・上岡　幸治 藤家　慎吾	河村　泰之・觀音　幸雄・原本　博史・張間　忠人 平田　浩一・藤本　義明・吉村　直道
理　科	岡本　慎次・辻井　修 森山由香里	家山　博史・大橋　淳史・熊谷　隆至・佐野　栄 日詰　雅博・向　平和
音　楽	来嶋　英生・遠藤　智保	石塚　真子・井上　洋一・岸　啓子・木村　勢津 田邉　隆・福富　彩子 石川　貴恵（附属小）・楠　俊明（附属小）
美　術	大川　博司・三好　安奈	杉林　英彦・福井　一真
保健体育	池内　裕紀・坪内　道広 金枡　栄佳	糸岡　夕里・日野　克博 大奈路　睦（附属小）・川本　賢一（附属小）
技　術 ・ 家　庭	楠橋　光久	大西　義浩・白濱　弘幸・森　慎之助
	中川　篤美	野中美津枝・中矢恵美香（附属小） 皆川　勝子（附属高校）
英　語	河野　圭美・吉岡　瞳	池野　修
行く河	山口　京子 松原　由起（H23年度転出）	太田　佳光・夏野　良司・日野　克博









2012 愛媛大学教育学部附属中学校研究紀要　第65号

平成25年２月

発行者　愛媛大学教育学部附属中学校
〒790-0855　松山市持田町１丁目５－22
TEL 089-913-7841　FAX 089-913-7842

印刷所　株式会社　松栄印刷所
〒790-0003　松山市三番町７丁目９－２
TEL 089-941-3334　FAX 089-933-7911

表 紙 作 品：愛媛大学教育学部附属中学校　１年　佐野　　栞
中表紙作品：愛媛大学教育学部附属中学校写生大会「青葉大賞」　１年　竹吉　諒太

